天文占書の解題と「天文占書フルテキストデータベース」の意義

前原　あやの

はじめに

中国の天文学史を研究するためには、歴代王朝の正史（中でも天文志・律暦志）と天文占書が主要な資料となる。『史記』天官書・暦書以来、歴代の正史の多くが天文律暦に関する項目を立ててきた。正史ではそのほか、本紀や列伝の中にも天象記事が散見する。一方の天文占書は、歴代の書目において天文類に分類される文献の中で、類書的形式を持つもの、つまり各天文書の記述（占辞等）を引用し項目ごとに配列した専門類書を指すこととする。[1] 内容は主に宇宙論や天文占、五行占、風角占、雲気占、暦や星の基本的事項である。しかし、天文占書はしばしば禁書の対象となり、刊本や抄本がわずかに現存するものの、抄本ごとに文字や文の異同が多く、同じ書名でも内容が大きく異なる場合がある。そのため、四庫全書に収録される『開元占経』や他の一部の天文占書を除いては、来歴が明確でなく扱いづらいために、研究資料として用いられにくい状況にある。

そこで筆者は、科学研究費補助金（研究活動スタート支援）の助成を受け、「天文占書フルテキストデータベース」（以下、本データベース、あるいは単にデータベースとも表記）を作成・公開した（http://www.temmon.org）。[2] これは、天文占書を電子テキスト化し、引用された天文書の書名、あるいは本文を検索可能にしたものである。二〇一六年四月時点では、『開元占経』、『天文要録』、『観象玩占』の三文献を公開している。

本稿では、データベース作成のために調査した天文占書の解題を作成し、そのうち本データベースで底本としたテキストの概要をまとめたうえで、本データベースの意義について論じる。

一　天文占書の解題

天文占書は、『開元占経』一二〇巻や『乾象通鑑』一〇〇巻など大部の資料が多いだけでなく、勅撰・私撰など異なる背景を有し

ており、それぞれに独自の特徴をもつ。また、天文占書は各々テキスト上の問題をも有する。そこで本章において、代表的な天文占書の概要をまとめておきたい。各文献の調査や訳注の作成は近年活発になってきているが、天文占書全体の実態は十分に明らかになっていないのが実情である。本稿における整理もまだ調査の途中段階であり、今後、より詳細な調査が必要であることを断わっておく。

本章で取り上げる文献は、二〇一六年四月現在データベースで公開している三文献だけではなく、今後公開を検討している文献をも含め、おおむね時代順に配列する。

（一）『霊台秘苑』

北周・庾季才（五一六～六〇三）撰。書目には、『隋書』経籍志に「霊台秘苑一百十五巻、太史令庾季才撰」、『旧唐書』経籍志に「霊台秘苑一百二十巻、庾季才撰」、『新唐書』芸文志に「庾季才霊台秘苑一百二十巻」とあり、『隋書』は巻数が異なるものの、『隋書』芸術伝の庾季才の項に「撰霊台秘苑一百二十巻」とあり、一二〇巻本が一般的であったと考えられる。そのほか、『通志』芸文略に「霊台秘苑百二十巻、隋太史令庾季才撰」、『四庫全書総目提要』（以下、『四庫提要』と略称）に「霊台秘苑十五巻、北周太史中大夫新野庾季才原撰」とあり、『四庫提要』では巻数が大きく減少していることがわかる。これは、宋代に王安礼等の重修を経ているためである。『四庫全書総目提要』術数類の存目には一二〇巻の『霊台秘苑』について記載があるものの、現在確認できるのは十五巻本のみであり、十五巻本は文淵閣四庫全書に収録されるほか、京都大学人文科学研究所（以下、人文研と略称）、静嘉堂文庫（二冊本と四冊本の二種）、東北大学、北京国家図書館や台湾国家図書館などに所蔵される。その一部を比較すると、大きく二種に分けることができる。現在確認している範囲では、①静嘉堂文庫本（二冊本）と人文研本のグループ、②静嘉堂文庫本（四冊本）、台湾国家図書館本、四庫全書本のグループである。両者はいずれも冒頭に「歩天歌」を引用するが、それぞれ「歩天歌」の星座の順序が異なる。①は紫微垣、太微垣、天市垣、二十八宿の順、②は二十八宿、太微宮、紫微宮、天市垣の順である。[3] また、巻二以降も項目の名称は類似するが内容が大幅に異なっており、今後細かく比較する必要がある。

また、「歩天歌」は隋、あるいは唐代に作られたと考えられているが、十五巻本には他にも元や明の内容が含まれており、一二〇巻本の内容をどこまで残しているか、あるいは本当に一二〇巻本を重修して十五巻本が成ったのかは明らかではない。

〔項目概要〕（人文研本）

歩天歌、星図／占例／主管／星纂／十二分野／天干地支／土圭晷景／雲気（戦に関する記述が中心）／霧、虹蜺／風気／

天占、地占、星総（三垣、二十八宿）／太陽／太陰／五星／三垣雑座・二十八宿と他の星座／瑞星／妖星／客星／流星／隕石

※四庫全書本では、星総（三垣、二十八宿）は占例の後にある。

〔関連文献〕

『文淵閣四庫全書』子部術数類

『湖北先正遺書』子部

『秘書集成』十二、占筮類（団結出版社、一九四四年）

韓連武「《霊台秘苑》的科学価値」（『文献』一九九八年第一期）

※人文研本の画像は、「東方学デジタル図書館」にて公開されている。

http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/toho/html/C003menu.html

（二）『乙巳占』

唐の李淳風（六〇二～六七〇）撰。李淳風は『晋書』天文志や『隋書』天文志の著者でもある。書目では、『旧唐書』経籍志に「乙巳占十巻、李淳風撰」、『新唐書』芸文志では二巻多く「乙巳占十二巻」、『宋史』芸文志に「李淳風乙巳占十巻」の記述がある。このほか『崇文総目』や『直斎書録解題』、『文献通考』に「乙巳占十巻」、『通史』芸文略に「乙巳占十二巻、秘閣郎李淳風撰」とある。

十万巻楼叢書の刊本は十巻本であるが、天津図書館蔵清抄本（続修四庫全書所収）は九巻本で、内容を比較すると項目が前後していたり、多少の異同がある。そのほか、静嘉堂文庫や香港大学に明写本があり、敦煌文書にも『乙巳占』の抄本がある（S.2669V,P.2536V）[4]。

〔項目概要〕（十万巻楼叢書本）

天／日／月／分野、占例、天文家、修徳など／五星／各五星と中外官／流星／客星／彗星、孛星／雑星、妖星／雲気、五星気など／戦と気象に関する占い

〔関連文献〕

『続修四庫全書』第一〇四九冊

『百部叢書集成』十万巻楼叢書

『叢書集成初編』〇七一二～〇七一三（中華書局、一九八五年）

薄樹人主編『中国科学技術典籍通彙』天文巻第四冊（河南教育出版社、一九九六年頃）

関増建「李淳風及其《乙巳占》的科学貢献」（『鄭州大学学報

（哲学社会科学版）』第三十五巻第一期二〇〇二年）

（三）『天文要録』

唐の李鳳（六一二～六七四）が麟徳元年（六六四）に撰述した。しかし中国では早くに散逸し、日本でも前田育徳会尊経閣文庫（以下、尊経閣と略称）に写本があるほか、その転写本である人文研本（二十五巻分）、また国立天文台本など数種しか現存しない。書目では日本の藤原佐世『日本国見在書目録』に「天文要録五十」とあるのみで、中国ではその名を留めない。

尊経閣文庫に残るのも、全五十巻のうち二十六巻分に過ぎない。しかし、日本では天文道の安倍氏（中世より賀茂氏も）や天文密奏宣旨の中原氏の天文奏文に、『天地瑞祥志』などとともに占断の典拠として利用される。また戸板保佑編『天文四伝書』（天理大学附属天理図書館蔵）「天文秘書」に『天文要録』の巻一（目録・序）が採録されており、日本ではしばしば用いられた形跡がある。元来は土御門家に代々継承されていたようであるが、土御門家所蔵本は現存しない。

内容は日月星辰に特化しており、各星座の気に関する項目はあるが、雲気、風角などは含まない。三家それぞれを内宮（官）と外官（宮）に分類する。[5] 中宮ではなく内宮と称する例はこれと『天地瑞祥志』のみである。

〔項目概要〕

日／月／五星／二十八宿／石氏／耳〔甘〕氏／巫咸

※完本が現存しないため、巻一の目録によった。

〔関連文献〕

薄樹人主編『中国科学技術典籍通彙』天文巻第四冊（河南教育出版社、一九九六年頃）

高柯立撰編『稀見唐代天文史料三種』（国家図書館出版社、二〇一一年）

中村璋八「天文要録について」（同『日本陰陽道書の研究』増補版、汲古書院、一九八五年。初出は一九六八年）

小林春樹、山下克明編『『天文要録』の考察』［一］（大東文化大学東洋研究所、二〇一一年）

田中良明「前田尊経閣本『天文要録』について」（神鷹徳治・静永健編『旧鈔本の世界』勉誠出版、二〇一一年）

細井浩志「国立天文台本『天文要録』について―旧内閣文庫本の再発見―」（『東洋研究』第一九〇号、二〇一三年）

※国立天文台本の画像は、国立天文台図書室の「貴重書データベース」にて公開されている。

http://library.nao.ac.jp/kichou/archive/0404/kmview.html

（四）『天地瑞祥志』

『天地瑞祥志』は、薩守真によって麟徳三年（六六六）に成立したという。だが、麟徳三年の年号は実際には存在せず、新羅で成立したという説もある。全二十巻のうち九巻分のみ現存し、『天文要録』と同様、尊経閣のほか人文研、東京大学東洋文化研究所（以下、東文研と略称）などに端本が存するのみである。内宮の前半部分は残欠しており全体像は明らかではないが、残存する巻七から推測すると、内宮に該当する星座は中宮とほぼ同様である。目録を見る限り、内容は瑞祥物や祭祀など多方面に亘る。

〔項目概要〕

啓／明載字／明災異／明分野／明災消福至／明目録／三才始／天地像／天／人／三光／黄道／日／月／五星／二十八宿／内官、外官／流星／客星、彗星、天漢／暈／雲気／雷、電など／風／雨／夢／音声、鬼、物精など／植物／月令／宅舎、光、血など／禽惣載（生物）／獣惣載／祭惣載

※完本が残存しないため、巻一の目録によった。

〔関連文献〕

薄樹人主編『中国科学技術典籍通彙』天文巻第四冊（河南教育出版社、一九九六年頃）

高柯立撰編『稀見唐代天文史料三種』（国家図書館出版社、二〇一一年）

中村璋八「天地瑞祥志について（附引書索引）」（同『日本陰陽道書の研究』増補版、汲古書院、一九八五年。初出は一九六八年）

太田晶二郎「『天地瑞祥志』略説―附けたり、所引の唐令佚文―」（『太田晶二郎著作集』第一冊、一九八五年。初出は一九七三年）

水口幹記『日本古代漢籍受容の史的研究』（汲古書院、二〇〇五年）

趙益・金程宇「『天地瑞祥志』若干重要問題的再探討」（『南京大学学報（哲学・人文科学・社会科学版）』二〇一二年第三期）

※なお、韓国でも研究論文が複数発表されているようであるが、筆者未見のため挙げなかった。

（五）『開元占経』

現在最もよく参照される天文占書である。唐の瞿曇悉達が開元年間に編纂した。宋代以降行方がわからなくなり、明の万暦四十四年（一六一六）に程明善が古抄本を発見したとされる。全一二〇巻。現在容易に参照できるものは、文淵閣四庫全書本、明大徳堂本（『中国科学技術典籍通彙』所収）、清恒徳堂刊本（『秘書集成』所収）であるが、テキスト間の文字の異同が多い。日本・中

国・台湾に抄本が多数伝存し、恒徳堂刊本は複数の機関に所蔵されている。佐々木聡氏は現在確認できる二十六種のテキストをほぼ全て調査し、程明善本系統、東洋文庫本系統、成化閣本系統の三種に分類した。[6] このうち成化閣本系統は、元・明の宮中において秘蔵され続け、清代に何らかの経緯で流出し、流布したと佐々木氏は述べる。

書目では、『新唐書』芸文志に「大唐開元占経一百一十巻、瞿曇悉達集」、『宋史』芸文志に「瞿曇悉達開元占経四巻」、『通史』芸文略に「大唐開元占経一百一十巻」とあり、「今存三」と注するなど、宋代以降完本が存在しない様子が目録からもうかがえる。

内容は宇宙構造論に始まり、天地日月について述べた後、星座を三家に分けて述べる。また後半には、インドの暦を漢訳した九執暦や、怪異に関する占いにも触れる。

〔項目概要〕（恒徳堂刊本）

天体渾宗／天／地／日／月／五星／二十八宿／石氏中官／石氏外官／甘氏中官／甘氏外官／巫咸中外官／流星／雑星／客星／妖星／彗星／風、雨、雲気など／霜、雪、雹など／雷、霆／暦法／星図／穀物、植物／人、鬼神／服、宮殿などの怪異／禽、獣、牛、馬など

〔関連文献〕

『文淵閣四庫全書』子部術数類
『秘書集成』九～十二、占筮類（団結出版社、一九九四年）
薄樹人主編『中国科学技術典籍通彙』天文巻第五冊（河南教育出版社、一九九六年頃）
『開元占経』中華易学集成・天文星象大全（中央編訳出版社、二〇〇六年）
瞿曇悉達『開元占経』上・下（九州出版社、二〇一二年）
安居香山「大唐開元占経識語考」（『漢魏文化』創刊号、一九六〇年）
安居香山「東洋文庫所蔵鈔本大唐開元占経補考」（『漢魏文化』第二号、一九六一年）
安居香山「大唐開元占経異本考」（『東京教育大学文学部紀要』第三十二号、一九六一年）
安居香山「台湾残存鈔本を中心とした大唐開元占経異本再論」（『漢魏文化』第八号、一九七一年）
黄復山「《開元占経》版本流伝考論」（殷善培、周徳良主編『叩問経典』台湾学生書局、二〇〇五年）
佐々木聡「『開元占経』の諸抄本と近世以降の伝来について」（『日本中国学会報』第六十四集、二〇一二年）
佐々木聡『『開元占経』閣本の資料と解説』（東北アジア研究センター、二〇一三年）

※関西大学所蔵の恒徳堂刊本の画像は、「CSAC Digital

Archives」にて公開されている。
http://www.db1.csac.kansai-u.ac.jp/csac/book_detail.php?Snm=1&Pgg=1&title=%E9%96%8B%E5%85%83%E5%8D%A0&digital=&places=&pMark=&kigou=&shiryo=&search=true&target=112522&
「CSAC Digital Archives」http://www.db1.csac.kansai-u.ac.jp/csac/index.php
また、人文研本（残三巻）の画像は、「東方学デジタル図書館」にて公開されている。
http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/toho/html/C004menu.html

（六）『観象玩占』

唐の李淳風撰、あるいは明の劉基（一三一一～一三七五）撰とされることが多いが、実際には後世の仮託と考えられており、撰者は不詳。成立年代の特定も難しいが、『開元占経』からの引用もあり、宋代頃の成立と考えられる。現在、『続修四庫全書』子部術数類に清華大学図書館蔵明抄本（五十巻本）の影印が収録されるほか、日本では宮内庁書陵部（以下、書陵部と略称）や東文研、人文研（四十九巻本）、尊経閣、蓬左文庫、慶應義塾聊斎文庫などにも所蔵される。このうち東文研本には劉基の序があり、蓬左文庫本ははじめに天文図があって、巻数の表記も大きく乱れている。また、慶應義塾聊斎文庫本は簡易の図を交え、『天元玉暦祥異賦』と共通する内容であり、他の『観象玩占』とは全く異なる。

抄本は中国国内にも数多く存在し、中でも中国・国家図書館、南京図書館には複数部所蔵される。そのほか『朝鮮史』第五編第八巻には、英祖七年（一七三一）十月四日に「観象監、観象玩占ヲ印進ス」との記述が見られ、『観象玩占』は韓国にも伝わり観象監によって「印進」されたことがわかる。[7] この時のものかは定かではないが、朝鮮刊本は、韓国・国立中央図書館、ソウル大学中央図書館（奎章閣）のほか、アメリカ・ハーバード燕京研究所（ハーバード大学内）にも現存する。ハーバード燕京研究所には朝鮮本以外にも三部の明鈔本がある。

『観象玩占』のうち筆者が確認した続修四庫全書本、東文研本、人文研本、尊経閣本、書陵部本について、特に目録や巻一の内容を比較すると、次のような相違がある。

続修四庫全書本と東文研本はともに全五十巻を甲集から癸集の十干に分類し、いずれも巻一に天と地に関する記述を載せるが、人文研本と尊経閣本、書陵部本には十干の分類はなく、巻一には天に関する記述のみを載せる。ほかにもそれぞれに占辞の配列が異なる、内容に増減があるなどの相違がある。特に東文研本は、他のテキストと文の並びが異なる上に、細目が大変多い。改行位置なども含め、全体的にかなり整った姿を有する。これら相互の関係性については、今後より一層の調査、検討が必要である。

書目では、『明史』芸文史に「観象玩占十巻、不知撰人、或云劉基輯」、『国史経籍志』に「観象玩占四十九巻」とある。

〔項目概要〕（続修四庫全書本）

天体／天変／地変※／日／月／五星／二十八宿／太微宮垣／紫微宮垣／天市垣／三垣雑座／二十八宿雑座／妖星、流星、隕星など／雲気／雷、雹、霜など／風角／地、日、月、星／拾遺

※地変は、続修四庫全書本と東文研本にはあるが人文研本と尊経閣本、書陵部本にはない。また三垣は東文研本では紫微垣、天市垣、太微垣と並ぶが、人文研本、書陵部本では太微垣、紫微垣、天市垣の順に並び、三垣雑座の順序は、続修四庫全書本では太微垣、紫微垣、天市垣の順だが、東文研本では紫微垣、太微垣、天市垣の順、人文研本ではただ星座のみが並ぶ。また、風角以降はテキストによって項目が大きく異なる。

〔関連文献〕

『続修四庫全書』第一〇四九冊

安居香山「大唐開元占経異本考」（『東京教育大学文学部紀要』第三十二号、一九六一年）第三章（ロ）

（七）『景祐乾象新書』

北宋・楊惟徳等撰。もとは三十巻だが、うち十二巻が続修四庫全書に影印される。そのほか、『秘書集成』と『羅雪堂先生全集』に巻三・四のみの刊本が影印され、国会図書館に清写本三十巻・拾遺一巻、東文研に二巻、人文研に十巻が現存し、中国・旧北平図書館蔵の明鈔本（マイクロフィルム）三十巻がある。しかし王重民氏は、明鈔本は偽作であると指摘する。[8] 王重民氏が指摘するのは北平図書館本のことと考えられるが、事実、明鈔本と巻三、四のみの残巻本の内容は大きく異なっており、区別して考える必要がある。田中良明氏も、中国・国家図書館本系統が正しく『景祐乾象新書』であり、もう一方の旧北平図書館本系統は偽書であると述べる。[9]

北平図書館本と人文研本は内容が共通するが、さらに『観象玩占』とも類似する。特に巻一を比較すると、北平図書館本と『観象玩占』続修四庫全書本では多くの引用が重なっていた。試みに張衡の佚文に注目して比較すると、『開元占経』には見られない佚文が『景祐乾象新書』北平図書館本と『観象玩占』に共通して見られ、両書の密接な関係がうかがえる。北平図書館本の実態解明のためには、『観象玩占』との関係を考慮する必要がある。

残巻本と明鈔本の内容は、いずれも歴代の占書および春秋から五代に至るまでの諸史から集めた占辞である。天文占のほか、雲気や風角などを含む。

書目では、『宋史』芸文志に「楊惟徳乾象新書三十巻」があり、『通志』芸文略や『直斎書録解題』にも同じく三十巻の記述がある。

〔項目概要〕（北平図書館本・人文研本）

天体／天変／日／月／五星／二十八宿／太微宮垣／紫微宮垣／天市垣／経星（他の星座）／客星、瑞星／妖星、流星、隕星など／雲気／虹蜺、雷、霹靂など／風角／地、日、月、星

※他のテキストは、全体の目録が残っていないため挙げなかった。続修四庫全書本では、二十八宿の後に七巻分の残欠があり、続いて五星合聚占などの五星相互に関する占い、彗星、孛星の項目がある。

〔関連文献〕

『続修四庫全書』第一〇五〇冊

『秘書集成』十五、占筮類（団結出版社、一九九四年）

羅振玉『羅雪堂先生全集』六編（一）（大通書局、一九七六年）

『中華再造善本』唐宋編子部之一（北京図書館出版社、二〇〇三年）

田中良明「北宋楊惟徳等撰『景祐乾象新書』諸本管見」（『東洋研究』第一九三号、二〇一四年）

（八）『乾象通鑑』

南宋の李季撰。高宗の建炎四年（一一三〇）に完成し、全一〇〇巻。序に、『景祐乾象新書』を参照して成り、『開元占経』の遺漏を補うという。『続修四庫全書』に明抄本七十巻分が影印される。また清抄本一〇〇巻が人文研に蔵される。

『乾象通鑑』には、「一行游儀後論」や「通天占」、「張平子通例」など他の天文占書に見えない資料が多く引用される。このうち「張平子通例」を例に取ると、平子は後漢の天文学者張衡の字であり、一見すると張衡の著作のように思われる。しかし、張衡に「通例」という著作はなく、引用される占辞も他の文献に見える張衡の佚文とは大きく異なっており、何から引用されたかが明らかではない。このように詳細が明らかではない資料が多く引用されており、南宋の天文占の状況を知る恰好の資料となる。

内容は、日月星辰、五星など、天文を中心とする。

〔項目概要〕

天／地、山／日／月／石申、甘徳、巫咸の中外官／三氏の紫微垣／晷景、昏暁中星、行数など／分野／五緯（五星）／三垣／二十八宿／雑座／五星／瑞星／妖星／流星／雑

〔関連文献〕

『続修四庫全書』第一〇五〇、一〇五一冊

このほか、『乾坤宝典天文』や『天元玉暦祥異賦』などの関連文献があるが、詳細が明らかではないため本稿では取り上げない。[10]

二　「天文占書フルテキストデータベース」で使用する底本について

本データベースで用いる三文献にはそれぞれいくつかのテキストがあるが、実際にデータベースで使用する底本について、来歴や特徴をまとめておこう。

（一）　開元占経

『開元占経』は、関西大学図書館内藤文庫所蔵の恒徳堂刊本を使用する（請求記号L二一＊一＊四六二－一～三二）。全三十二冊。恒徳堂刊本は、国立国会図書館、人文研、一橋大学、岡山県立図書館、大阪大学図書館などにも所蔵され、広く出回ったと考えられる。清代に刊行され、見返しには「重刊大唐開元占経百廿卷」「謹遵」「欽定四庫全書校本」「恒徳堂蔵板」の字が見え、四庫全書本を元に刊行されたとある。ただし、文淵閣四庫全書所収の『開元占経』と比較すると、文字の異同がしばしば見られ、佐々木聡氏は四庫全書以前の抄本の流れを汲むと指摘する。[11]

第一葉には万暦四十五年（一六一七）の程明哲・張一熙の識語があり、そこには緯書が七十余種採録されていること、長い間秘匿され、宋・元の際には誰も見ることができなかったこと、程明善が古仏の腹中より見つけ出したことなどが記される。

その目録は次の通りである。

巻一	天体渾宗
巻二	論天
巻三	天占
巻四	地占
巻五～十	日占
巻十一～十七	月占
巻十八～二十二	五星占
巻二十三～二十九	歳星占
巻三十～三十七	熒惑占
巻三十八～四十四	填星占
巻四十五～五十二	太白占
巻五十三～五十九	辰星占
巻六十	東方七宿（角亢氐房心尾箕）
巻六十一	北方七宿（斗牛女虚危室壁）
巻六十二	西方七宿（奎婁胃昴畢觜参）
巻六十三	南方七宿（井鬼柳星張翼軫）
巻六十四	分野畧例　月所主国　日辰占邦　災変応期　逆順略例
巻六十五～六十七	石氏中官
巻六十八	石氏外官

巻六十九　甘氏中官
巻七十　甘氏外官　巫咸中外官
巻七十一～七十五　流星占
巻七十六　雑星占
巻七十七～八十四　客星占
巻八十五～八十七　妖星占
巻八十八～九十　彗星占
巻九十一　風占
巻九十二　雨占
巻九十三　候星善悪占
巻九十四　雑気雲占
巻九十五　雲気犯二十八宿占
巻九十六　雲気犯列宿占　石氏中外官占
巻九十七　猛将軍陣勝負雲気占
巻九十八　虹霓占
巻九十九　山石冢光占
巻一〇〇　井泉自出河移水火占
巻一〇一　霜雪雹氷寒霧露霾曀霰霧濛占
巻一〇二　雷霆占
巻一〇三　暦法　麟徳暦経
巻一〇四　算法　天竺九執暦経
巻一〇五　古今暦積年及章率
巻一〇六～一一〇　星図
巻一一一　八穀占
巻一一二　竹木草菜占
巻一一三　人及鬼神占
巻一一四　器服休咎城邑宮殿怪異占
巻一一五　禽占
巻一一六　獣占
巻一一七　牛占
巻一一八　馬占
巻一一九　羊犬豕占
巻一二〇　龍魚虫蛇占

（二）天文要録

『天文要録』は、これまで尊経閣本が主な研究対象であったが、近年天文台本にも注目が寄せられており、本データベースでも天文台本を使用する（番号四〇四）。天文台本は全十七冊あるが、第一巻が二冊あるため、内容は十六巻分である。本データベースでは、系統の異なる第一冊（図書番号〇一七四八）を除き、第二冊の「目録序第一」からを対象とする。各冊首に「日本政府図書」、「大日本帝国図書印」、「明治十二年購求」の朱印がある。天文台本に関しては、細井浩志「国立天文台本『天文要録』について―旧内閣文庫本の再発見―」があるので、以下、これに依拠しつつ天

文台本の来歴を述べる。

細井氏は、第一冊目と第三冊目の裏表紙の裏打ち紙の紙背の端に、書き込みと書肆の印があることから、永楽屋→浅倉屋→幕府天文方と転売され、幕府瓦解後に別の古書肆に売られたものを内務省が明治十二年（一八七九）に購入したと想定する。[12] その後、内閣文庫に移管され、現在は国立天文台に所蔵される。尊経閣本とは行数や傍書が類似するものの、本テキストは尊経閣本を写した訳ではなく、尊経閣本から写した訳でもないようである。細井氏は、両者は藍本を同じくする兄弟関係であろうと述べる。

その目録は次の通りである（巻数のあとに（欠）とあるものは現存しない巻）。ただし、目録に巻数はなく、筆写が参考までに付したものである。

巻一　序第一（条二二二）
巻二（欠）　日災図占第二（占条二一〇）
巻三（欠）　月災図占第三（占条一五三）
巻四　日占第四（占条二四四）
巻五　月占第五（占条三六二）
巻六（欠）　歳星占第六（占条二六四）
巻七（欠）　熒惑占第七（占条二四一）
巻八（欠）　鎮星占第八（占条二七一）
巻九（欠）　太白占第九（占条二六九）
巻十　辰星占第十
巻十一　角占第十一（占条二八八）
巻十二（欠）　亢占第十二（占条二三一）
巻十三（欠）　氐占第十三（占条二二六）
巻十四　房占第十四（占条二八四）
巻十五（欠）　心占第十五（占条二六八）
巻十六　尾占第十六（占条二三二）
巻十七　箕占第十七（占条二二九）
巻十八（欠）　斗占第十八（占条二三八）
巻十九（欠）　牛占第十九（占条二九九）
巻二十　女占第二十（占条二六三）
〔巻二十一（欠）　虚占第二十一〕[13]
巻二十二（欠）　危占第二十二（占条二二四）
巻二十三（欠）　室占第二十三（占条二六〇）
巻二十四　壁占第二十四（占条二二〇）
巻二十五（欠）　奎占第二十五（占条二六七）
巻二十六　婁占第二十六（占条二四八）
巻二十七（欠）　胃占第二十七（占条二二一）
巻二十八　昴占第二十八（占条二六九）
巻二十九　畢占第二十九（占条二一三）
巻三十　觜占第三十（占条二一一）
巻三十一　参占第三十一（占条二四四）
巻三十二（欠）　東井占第三十二（占条二五九）

巻三十三	鬼占第三十三（占条二四四）
巻三十四（欠）	柳占第三十四（占条二一九）
巻三十五	星占第三十五（占条二二一）
巻三十六（欠）	張占第三十六（占条二一三）
巻三十七（欠）	翼占第三十七（占条一〇九）
巻三十八（欠）	軫占第三十八（占条二六四）
巻三十九（欠）	石内宮占第三十九（占条六五八）
巻四十	石内宮占第四十（占条四九九）
巻四十一	石内宮占第四十一（占条三七三）
巻四十二（欠）	石内宮占第四十二（占条四三七）
巻四十三	石内宮占第四十三（占条二〇六）
巻四十四	石内宮占第四十四（占条二九三）
巻四十五	石内宮占第四十五（占条一五〇）
巻四十六	石外宮占第四十六（占条七三五）
巻四十七（欠）	甘[14]内宮占第四十七（占条四一二）
巻四十八	甘内宮占第四十八（占条四四六）
巻四十九	甘外宮占第四十九（占条三六三）
巻五十	巫内外宮占第五十（占条二七二）

（三）観象玩占

『観象玩占』は、宮内庁書陵部所蔵の写本を使用する（函架番号四〇四・一四）。書陵部の目録には「清人写」とあるが、嚴紹璗編著『日蔵漢籍善本書録』（中華書局、二〇〇七年）には「明人紅格写本」とある。二套、全二〇冊。各冊首に「秘閣図書之章」の印がある。印は明治五年以降に押されたもので、明治維新後の新収資料に押された例もあるものの、この印があるものはおおむね紅葉山文庫旧蔵本と考えられる。

書陵部本の来歴を検討するうえで重要な資料が国立公文書館にある。『書物方日記』は紅葉山文庫の書物の出納などを記録した日記であるが、宝暦十二年（一七六二）六月十日に、当時側衆であった田沼主殿頭（意次）が次の書物を寄贈した記録が見える。[15]

例案全集	八套	八十冊
全唐詩鈔	四套	三十二冊
律賦彙鈔	一套	六冊
双渓倡和詩	一套	二冊
観象玩占	二套	二十冊
御製律暦淵源	十二套	百二十冊
禹貢錐指	一套	八冊
大清律例	二套	二十冊
都合弐百八拾八冊	三拾壱套	

このうち『観象玩占』は套数・冊数ともに書陵部本と一致しており、秘閣印と併せて考えると、田沼意次が紅葉山文庫に寄贈した『観象玩占』が、現在書陵部に所蔵されていると考えられる。

さて、田沼意次がいつ頃『観象玩占』を入手したのかについて、

今一歩考察を進めたい。大庭脩『江戸時代唐船持渡書の研究』に『商舶載来書目』（国立国会図書館蔵）が翻刻されているが、宝暦九年（一七五九）に『観象玩占』一部二套が舶載されたという記述がある。[16] これが書陵部本と同一かどうかの確証はないが、『商舶載来書目』には田沼が『観象玩占』と同時期に寄贈した他の文献の名も見え、それぞれ冊数も一致する。他機関所蔵の『観象玩占』は、東文研本が二套二十冊であるものの、尊経閣本、蓬左文庫本はともに十冊、京都大学人文科学研究所本が十六冊と、冊数が一致しない。再綴すれば冊数は変わるため一概にはいえないが、舶載された『観象玩占』は、書陵部本である可能性が高い。

『商舶載来書目』は、長崎書物改役を代々任ってきた向井家の「旧記」をもとに、向井富が編纂した第二次資料である。「旧記」は書籍検閲の際の記録を指す。大庭氏によれば、『商舶載来書目』に記録された年は実際に舶載された年を指すのではなく、書物改手続の終わった年を指す場合があり、舶載年より一、二年のずれがあると考えられるという。[17] 田沼寄贈の文献は、『観象玩占』が宝暦九年、『例案全集』が享保十一年（一七二六）に記述される以外は、すべて宝暦十一年（一七六一）か十二年（一七六二）に記載されている。田沼は、入手した文献を比較的早期に紅葉山文庫に寄贈したと考えられる。

このように、中国から舶載された『観象玩占』は田沼意次の手に渡り、宝暦十二年に紅葉山文庫に寄贈され、その後、明治の世になって宮内省図書寮（現在の宮内庁書陵部）へ移ったと推察できよう。

書陵部本の目録は次の通りである。

巻一	天体　天変異占	天雨異物占
巻二	日占及変異	日蝕占
巻三	日蝕占　日以十干十二支日蝕占	
巻四	月変異占　月蝕占	日月五星並見占
巻五	五星総叙　五星占法	
巻六	五星占法　月五星干犯占	
巻七	日月五星与客星相犯占　五星合闘占	
巻八	五星合闘占　五星相干犯占	
巻九	歳星総叙及変異	
巻十	歳星変異　熒惑総叙及変異	填星総叙及変異
巻十一	太白総占及変異	
巻十二	辰星総占及変異　五星犯列舎及中外官占	
巻十三	経星二十八舎	
巻十四	角宿総占　亢宿星占	
	亢宿星占　氐宿星占	房宿星占
	房宿星占　心宿星占	
	心宿星占　尾宿星占	箕宿星占
	斗宿星占　牛宿星占	

巻十五　女宿星占　虚宿星占　危宿星占
巻十六　危宿星占　室宿星占　壁宿星占
巻十七　壁宿星占　奎宿星占　婁宿星占
巻十八　胃宿星占　昴宿星占
巻十九　畢宿星占　觜宿星占
巻二十　参宿星占　井宿星占
巻二十一　鬼宿星占　柳宿星占
巻二十二　柳宿星占　星宿星占　張宿星占
巻二十三　翼宿星占　軫宿星占

経星三垣

太微宮垣星占
巻二十四　太微垣星占　紫微垣星占
巻二十五　天市垣星占　北極星占　四輔星占　天乙星占　太乙星占　鈎陳星占　天皇大帝星占　五帝内座星占　陰徳星占　尚書星占　柱下史星占　女史星占　女御星占　天柱星占
巻二十六　大理星占　六甲星占　華蓋星占　伝舎星占　内階星占　天厨星占　天床星占　内厨星占　北斗星占　輔星占　天理星占　相星占　太陽守星占
巻二十七　勢星占　三公星占　文昌星占　天牢星占

巻二十八

太尊星占　三台星占　八穀星占　天棓星占　天槍星占　玄戈星占　招摇星占　梗河星占　七公星占　貫索星占　天紀星占　女床星占　扶筐星占　天鈎星占　天市帝座星占　候星占　宦者星占　宗正星占　宗人星占　宗星占　帛度星占　屠肆星占　列肆星占　斗星占　斛星占　車肆星占　市楼星占　太微五帝座占　謁者星占　三公星占　九卿星占　五諸侯星占

巻二十九

屏星占　幸臣星占　太子星占　従官星占　郎将星占　虎賁星占　常陳星占　郎位星占　明堂星占　霊台星占　少微星占　長垣星占　摂提星占　大角星占　平道星占　進賢星占　天田星占　天門星占　平星占　庫楼星占　南門星占　周鼎星占　帝席星占

巻三十

亢池星占　拆威星占　頓頑星占　陽門星占　天乳星占　騎官星占　陣車星占　車騎星占　騎陣将軍星占　天輻星占　積卒星占　鈎鈴星占　鍵閉星占　罰星占　東咸西咸星占　日星占　従官星占　天江

星占　傅[18]説星占　魚星占　亀星占　杵
星占　糠星占　建星占　天弁星占

巻三十一

鱉星占　天鶏星占　狗国星占　狗星占
天淵星占[19]　九坎星占　羅偃星占　河鼓星
占　左右旗星占　天桴星占　織女星占
漸台星占　輦道星占　天津星占　十二国
星占　離瑜星占　敗臼星占　璃珠星占
瓠瓜星占

巻三十二

敗瓜星占　奚仲星占　司命司禄司危司非星
占　人星占　杵臼星占　車府星占　造
父星占　墳墓星占　哭泣星占　天墨城星
占　虚梁星占　土公吏星占　墨壁陣星占
羽林軍星占　鉄鉞星占　鉄鎖星占　北落
師門星占　八魁星占　天綱星占　螣蛇星
占　天厩星占　王良星占

巻三十三

附路星占　閣道星占　策星占　天大将軍
星占　軍南門星占　外屏星占　天溷星占
土司空星占　左庾右庾星占　天倉星占
天庾星占　天廩星占　天囷星占　太陵星
占　積屍星占　天舡星占　積水星占
巻舌星占　天讒星占　天狗星占　月星占
天陰蒭藁占　天苑星占　礪金石星占

巻三十四

五車口星占　天横星占　咸池星占　天街
星占　天関星占　天節星占　諸王星占
天高星占　九州殊口星占　参旗星占　九
游星占　天園星占　坐旗星占　司怪星占
玉井星占

巻三十五

屏星占　天厠星占　天屎星占　軍井星占
南河北河星占　天罇星占　五諸侯星占
積水星占　積薪星占　水位星占　軍市星
占　野鶏星占　丈人星占　子孫星占
闕丘星占　水位星占　天狼星占　弧矢星
占

巻三十六

老人星占　天狗星占　天社星占　天稷星
占　外厨星占　天紀星占　爟星占　酒
旗星占　軒轅星占　内平星占　天相星占
天廟星占　東甌星占　軍門星占　土司空
星占　青丘星占　器府星占　諸星雑占
恒星夜不見占　雑星昼見

巻三十七

雑星変占　客星総占　瑞星総占　妖星総
占　乾坤変異占　土星雑占

巻三十八

妖星総占　妖星雑占　日月旁妖星占　流
星総占　流星名状　流星昼見占　流星雑
占　五星自流占　枉矢星占　天狗星占

巻三十九　隕星総占　営首星占　慶雲占
雲気総占　瑞気占　妖気占　日月旁気占
日旁気占
巻四十　日旁雲気占　月旁気占
巻四十一　帝王気占　賢人気占　将軍気占　兵気占
陰謀気占　堅城気占　屠城気占　軍城気
候雑占　風雨気占　雑雲気占　九土異気
占　軍陣異気　候気法
巻四十二　霧占（蒙霧附）　虹蜺占　雷占　霹靂占　霆
占
巻四十三　電占　雹占　霜占　雪占　氷占　雨
占　東方朔占　露占　雲漢占
巻四十四　角風　候風法　風名状　占験決法　五
音占風法　地支十二辰五音法　五音相動風
占
巻四十五　五岳之音風占　五音風声占法　雑占五音風
五音主客占法　六情占法　六情風鳥所起加
時占　十干風幷十二支辰風占　天門風占
八方暴風占
巻四十六　歳首風占　八節風占　乙巳略例八節風占
三辰八角風占　占風知兵　出軍占風　両
軍相守風占　城営占風　辺夷水賊風占
水火災風占
巻四十七　候風知詔書　候風知赦　候風知遷官免罪法
候公郷二千石出入　候喪疾風占　救万姓疫
法　飄風占　占風来遠近法　観風知族類
数　対敵八卦風占
巻四十八　十二歳月日時占風　二刑相会風占　雑占風
四季　占拾遺風吉凶　五音次序　地変異
占　山川変異占　土石井邑塚墓雑占
巻四十九　玉衡九星所主　日中気占　日変異占　日
蝕占　日旁星占　月変異占　月暈二十八
宿占　月犯二十八宿占　月蝕占　月五星
変色占　北斗星占　月旁気占
巻五十　北斗占五谷善悪法　老人星占　辰星附太白
妖星占　彗星占　流星占　雲気占　霰
占

各巻の項目は、他のテキストと大きなずれがある。項目の区切れ目で巻を分けるのが一般的であるが、房宿星占（巻十一、十二）や心宿星占（巻十二、十三）に見られるように、書陵部本は巻をまたいで項目が続いているのが特徴である。この特徴は人文研本と共通する。

三　「天文占書フルテキストデータベース」の意義

本データベースは、天文占書を電子テキスト化し公開することで、資料そのものを見なくても必要な箇所を検索可能にするという目的で作成した。現在のところ、一部の天文占書は影印出版されているが、容易に見ることのできない天文占書も多い。また、影印されていても、巻数の多い文献も多いため、全体を確認することは大変な作業である。実際に研究に用いようと思っても、ハードルが高い状況にあった。

筆者はかつて、天文占書に引用された『海中占』の佚文を収集・整理し、その特徴について論じた[20]。佚文は主に『開元占経』、『観象玩占』、『天文要録』の三書に多く引用されていたが、その収集のためには所蔵機関での調査、複写資料の入手に加え、資料全体を隈なく確認し佚文を取り出す作業が必要であり、多大な労力と時間を費やした。そこで、本データベースの必要性を感じたのである。本データベースを利用することで、天文書それぞれの内容を収集・比較し、成立年代や場所の検討に基づき各々の特徴を明らかにすることが可能になる。無論、佚文を精査するためには原書に当たらなければならないが、探索の手間を軽減することはできよう。

また、天文占書間の類似の占辞を比較することで、天文占書相互の関係性についても検討することができる。たとえば『海中占』には、次のような佚文がある。

歳星犯守天稷、有旱災、五穀不登、歳大饑。一曰五穀虫。（『開元占経[21]』巻二十九）

熒惑犯守天稷、有旱災、五穀不登、歳大飢。一曰、五穀散。（同、巻三十七）

太白犯天稷、有旱災、五穀不登、歳大飢、五穀散出。（同、巻五十二）

辰星守天稷、有旱災、五穀不登、歳大飢。一曰、五穀散出。（同、巻五十九）

これらはいずれも『開元占経』に引用された佚文であり、五星それぞれの巻に引用されている。五星のうち填（鎮）星には該当する占辞はないが、残りの四星でほぼ共通する内容となっている。一方『観象玩占』には、

五星犯守天稷、海中占曰、有大旱、穀不成、大飢。（『観象玩占[22]』巻三十六）

と、五星をまとめて表記する類似の占辞がある。本来どのような形だったのかは明らかではないが、こうした天文占書ごとの記述方法の相違を比較する際にも、データベースが有用である。

これまで資料そのもの（あるいは複写資料）を通してしか研究することのできなかった天文占書を電子テキスト化し、データベースとして公開することで、天文学史のみならず術数学、科学史、思想史などの関連分野における当該資料の検索を可能にし、アプ

ローチの幅を広げ、効率化を図ることができよう。

おわりに―今後の展望

本稿では、天文占書の提要をまとめ、データベースに用いた底本を取り上げて特徴を論じた。特に、これまでほとんど取り上げられることのなかった『観象玩占』についての調査をまとめ、宮内庁書陵部本の来歴について検討した点が大きな成果といえよう。

今後本データベースでは、第一章で取り上げた他の天文占書も公開していく予定である。天文占書の数を増やすことで、天文占書間の比較をより一層容易にし、中国天文学の実像に迫ることができるようになると考えている。

本論文は、JSPS科研費（研究活動スタート支援）二六八八四〇七三の助成を受けた成果の一部である。

なおデータベースの作成には、関西大学アジア文化研究センター（CSAC）ポスト・ドクトラルフェローの氷野善寛氏、ステイションネットの藤野氏に助言や協力をいただいた。ここに記して謝意を表したい。

注

（1）現在のところ定まった呼称はなく、天文五行占書、天文類書など様々に呼ばれている。

（2）ホームページのアドレスは、二〇一五年十二月現在。以下に挙げるアドレスも同様である。

（3）紫微垣と紫微宮、太微垣と太微宮はそれぞれ同一である。また、「歩天歌」の星座の順序には何通りかあり、いずれが正しいと一概には言えない。「歩天歌」に関しては周暁陸『歩天歌研究』（中国書店、二〇〇四年）が詳しい。

（4）黄正建『敦煌占卜文書与唐五代占卜研究』（学苑出版社、二〇〇一年）。また、敦煌本『乙巳占』について、田中良明氏の「敦煌文書と『乙巳占』」と題する研究発表がある（術数学国際ワークショップ 二〇一三―七、二〇一三年七月二十日）。

（5）原文は「宮」と「官」を混用しているが、おおむね「内宮」「外宮」と使い分けているようである。

（6）佐々木聡「『開元占経』の諸抄本と近世以降の伝来について」（『日本中国学会報』第六十四集、二〇一二年）、同『『開元占経』閣本の資料と解説』（東北アジア研究センター、二〇一三年）。

（7）印進の意味は定かではないが、印刷・進呈の意と考えられる。

（8）王重民『中国善本書提要』（上海古籍出版社、一九八三年）二八三頁。王氏は「北京図書館所蔵の明鈔本」と述べるが、旧北平図書館蔵本のことであろう。徐振韜主編『中国古代天文学詞典』（中国天文学史大系、中国科学技術出版社、二〇〇九年）の「景祐乾象新書」の項でも同意見を挙げる。

（9）田中良明「北宋楊惟德等撰『景祐乾象新書』諸本管見」（『東洋研究』第一九三号、二〇一四年）。

（10）『乾坤宝典』は北宋・史序（九三三～一〇一〇）の撰。元代に政府によって禁書に指定される。山東省図書館所蔵の明鈔本（不分巻）『乾坤宝典天文』が『四庫禁燬書叢刊』に影印されるものの、『乾坤宝典』の内容をどこまで引き継いでいるかは不明。『天元玉暦祥異賦』については、馮錦栄「『天元玉暦祥異賦』小考」（山田慶兒・田中淡編『中国古代科学史論』続篇〔京都大学人文科学研究所、一九九一年〕所収）、佐々木聡「『天元玉暦祥異賦』の成立過程とその意義について」（『東方

宗教』第一二二号、二〇一三年）を参照。

（11）佐々木聡「『開元占経』の諸抄本と近世以降の伝来について」（『日本中国学会報』第六十四集、二〇一二年）、同『『開元占経』閣本の資料と解説』（東北アジア研究センター、二〇一三年）。

（12）細井浩志「国立天文台本『天文要録』について―旧内閣文庫本の再発見―」（『東洋研究』第一九〇号、二〇一三年）

（13）目録から記述自体が抜け落ちているが（他のテキストも同様）、二十八宿の並びに基づき補った。

（14）実際の目録は「甘」を「耳」に作る。巻四十八、四十九も同様。

（15）『書物方日記』第七十六冊。該当箇所は、氏家幹人「書物方年代記二」（『北の丸』第四十三号、二〇一一年）に翻刻されている。

（16）大庭脩『江戸時代唐船持渡書の研究』（関西大学東西学術研究所、一九六七年）六九六頁。なお、『商船載来書目』には元文五年（一七四〇）にも『観象玩占天文総図説』一部二本の記述が見えるが、書名が少し異なり、時期的にも宝暦九年の『観象玩占』が田沼の寄贈書であると判断した。

（17）大庭脩『江戸時代における中国文化受容の研究』（同朋舎、一九八四年）一五五頁。

（18）実際の目録は「伝」の正字「傳」のようであるが、他書に基づき「傳」とした。

（19）この後に、実際の巻三十には天籥、農丈人、天田の三星座の記述がある。

（20）拙稿「『海中占』関連文献に関する基礎的考察」（『関西大学中国文学会紀要』第三十四号、二〇一三年）、同「『海中占』の輯佚」（『関西大学東西学術研究所紀要』第四十六輯、二〇一三年）。

（21）恒徳堂本。

（22）書陵部本。なお、『続修四庫全書』所収の清華大学図書館藏明抄本では巻三十三に引用される。

A bibliographic introduction to books on astronomical divination, and the significance of the "Full-Text Database of Books on Astronomical Divination"

MAEHARA Ayano

The present author received a Grant-in-Aid for Scientific Research (Grant-in-Aid for Research Activity Start-up) in order to create and publish a "Full-Text Database of Books on Astronomical Divination." This project converts these works into digital format, making their titles and main texts fully searchable. The present paper provides a bibliographic introduction to the books on astronomical divination surveyed in the process of compiling the database.

It then discusses the significant features of the works selected as source texts for the database. Among them, the copy of *Guanxiang wanzhan* in the collection of the Archives and Mausolea Department of the Imperial Household Agency is believed to have been shipped from China and acquired by Tanuma Okitsugu. He subsequently donated it, in Horeki 12 (1762), to the shogunal library, Momijiyama Bunko, from which it is believed to have been transferred to the Archives and Mausolea Department sometime during the Meiji period (1868–1912).

The significance of the database is that it provides searchable, citable access to rare books on astronomical divination and permits comparative examination of differences in their methods of composition.

キーワード：天文占書（Astronomy diviner's book）、観象玩占（Guanxiang wanzhan）、開元占経（Kaiyuan zhanjing）、天文要録（Tianwen yaolu）、星座（Constellation）